内容項目・・・道徳の授業を通して子供たちに教えること

「思いやり」や「生命尊重」など、道徳で教える内容のことを、内容項目といいます。徳目という人もいますが、内容項目と言いましょう。

新学習指導要領で、内容項目は、小学校低学年では１９、中学年では２０、高学年では２２、中学校では２２項目あります。それらの内容項目は、「A 自分自身に関すること」「B 他の人との関わりに関すること」「C 集団や社会との関わりに関すること」「D 生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の４つの視点で分類され、学習指導要領解説で具体的に示されています。

どの内容項目も毎年必ず指導しなければならないことになっています。小学校高学年では、指導すべき内容項目が２２項目で道徳の年間授業時間数が３５時間ですから、３５時間から２２時間を差し引いた残りの１３時間分が、担任の先生が内容項目を自由に選んで、自分の学級の実態に応じた指導をすることができます。

自分の学級で「思いやりのある子供を育てたい」と考えれば、「思いやり」を扱う別の教材を使って指導する。３つ取り上げれば、年間で３時間の「思いやり」の指導することができます。さらに、「思いやり」を支えるために必要だと考えた「勇気」「正直」「個性の伸長」「友情」「尊敬」「家族愛」など６つの内容項目の指導を１回ずつ追加して行えば、それだけで２２時間+２時間+６時間の合計３０時間行うことになります。「思いやり」の重点的な指導は、このように行います。生活指導等で、目の前で繰り返し起こった問題を取り上げ、対処療法で道徳の授業を行っていくと、後で年間の指導を振り返った場合、特定の価値観だけに偏った指導をしていたという場合もあると思います。

だからこそ、あらかじめ学級の子供の実態を丹念に把握した上で、指導計画を立て、意図的・計画的・継続的に指導を重ねる必要があります。

ちなみに、B【親切・思いやり】の指導の観点について、学習指導要領の解説には、次のように示されています。

【親切、思いやり】

●小学校第１学年及び第２学年

「身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること」

●小学校第３学年及び第４学年

「相手のことを思いやり、進んで親切にすること」

●小学校第５学年及び第６学年

「誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること」

●中学校

「思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること（中学校では、親切・思いやりと感謝をあわせて指導します）」

若い先生方と教材「くりのみ」（低学年「友情」に関する教材）の発問研究をした際、その教材で取り上げるべき価値内容を伏せたままで分析を進めため、「思いやり」を意識した発問構成にまとまりそうになり、少しあわてたことがあります。

「友達と仲良くし、助け合う」。これが低学年の「友情」で指導しなければならない内容です。「思いやり」で指導する内容は、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること」です。きわめて似た内容です。では違いはどこにあるか分かりますか。違いを明らかにした上で指導しないと、先生も混乱し、子供を混乱させる原因となります。

もうちょっと内容項目　Ｂ７「親切、思いやり」研究

もう少し内容項目の話を進めていきます。

「学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」の第３章第２節に、「内容項目の指導の観点」があります。Ｂ「７　親切、思いやり（Ｐ38)」を見ると、学年別の指導内容が示されるとともに、「(1) 内容項目の概要」として次のように記されています。

より良い人間関係を築く上で求められる基本的姿勢として、相手に対する思いやりの心をもち親切にすることに関する内容項目である。

自分のことばかりを考えたり、自分の思いだけを主張したりしていては望ましい人間関係を構築することはできない。お互いが相手に対して思いやりの心をもって接するようにすることが不可欠である。**思いやりとは相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。**そのためには、相手の存在を受け入れ、相手のよさを見出そうとする姿勢が求められる。具体的には、相手の立場を考えたり相手の気持ちを想像したりすることを通して励ましや援助をすることである。また、単に手を差し伸べることだけではなく、時には相手のことを考えて温かく見守ることも親切な行為としての表れである。相手のことを親身になって考えようとする態度を育てることが期待される。特に、学校生活においては、学校の人々や友達など様々な人と直接的に多様な関わり合いをもてるようにすることが求められる。その上で、相手の立場を考えたり、相手の気持ちを思いやったりすることを通して、思いやりや親切な行為の意義を実感できる機会を作っていくことが重要である。

内容項目の指導の必要性や方向性示されています。どの学年の指導をする際も、必ず最初に読んで押さえておきたい部分です。

さらに、「(2)　指導の要点」には、学年段階で特に求められる指導の留意点が記されています。その学年の子供の心理的な発達段階や行動特性を理解し、指導の手立てを考えたり子供の発言を予測したりするために大変参考になります。

●第１学年及び第２学年

この段階においては，家族だけでなく家の周りの人や学校の人々、友達などとの関わりが次第に増えてくる。発達的特質から自分中心の考え方をすることが多いが、様々な人々との関わりの中から、相手の考えや気持ちに気付くことができるようになる。

指導に当たっては、幼い人や高齢者、友達など身近にいる人に広く目を向けて温かい心で接し、親切にすることの大切さについて考え、優しく接することができるようにすることが求められる。また、その結果として相手の喜びを自分の喜びとして受け入れられるようにし、具体的に親切な行為ができるようにすることが大切である。

●第３学年及び第４学年

この段階においては、学校生活を中心として友達同士の交流が活発になるとともに、活動範囲も広がってくる。様々な人々との関わりが次第に増えていく中で、相手の気持ちを察したり、相手の気持ちをより深く理解したりすることができるようになる。一方、ともすると他の人々の考え方や感じ方が自分たちの考え方や感じ方と同様であると思い込みがちになることも、この時期の特徴と言われている。そのため、相手に対する思いやりの心を育てることが一番重要になる。

指導に当たっては、相手の置かれている状況、困っていること、大変な思いをしていること、悲しい気持ちでいることなどを自分のこととして想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるようにしていくことが大切である。

（第５・６学年、中学生は紙面の都合で省略）

私は、指導案を作ったり検討したりする際、最初にここを見て研究します。目の前の子供の状況を客観的に見るための視点が明確になります。